

「目を覚ましていなさい」

2014年11月12日

マルコによる福音書 13章 32節～37節。「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも知らない。父だけがご存じである。気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

主イエスは、世の終わりの裁き、終末の到来について語られた。大いなる苦難の後、天体に異変が起こる。その時、人の子・キリストは栄光を帯びて、雲に乗って来る。人の子は天使たちを遣わし、選ばれた人々を四方から呼び集める。終末の救いの完成の時が来たのである。終末前後の出来事を「黙示」表現で、絵画的に描き、そして「わたしの言葉は決して滅びない」と終末は確かであると明言された。

その終末の日はいつか。それは誰も知らない。天使も知らない、ただ、父なる神だけがご存じである。時々、終わりの裁きの日は何年何月何日であると言い、信者から全財産を集めるニセ教祖が現われるが、全くのまやかしである。その日は分からない。だから、主イエスは「気をつけて、目を覚ましていなさい」と言われる。家を後にして旅に出る主人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせる。また、門番に目を覚まして待つように言いつける。主人はいつ帰ってくるのか、夕方か、夜中か、明け方か、分からない。

旧ホーリネス教会で育ち、牧師夫人になった方から、こんな話を聞いたことがある。ホーリネス教会はキリストの再臨を力説し、リアルに信じるように教えた。また、ホーリネス教会は墮落するからと、映画や演劇は観てはならないと教えていた。ところが、彼女が女学生の頃、どうしても観たい映画があり、教会の教えを破って映画館に入って、映画を観た。しかし、観ている最中にキリストが再臨し裁かれたら、罪人として地獄に落とされはしないかと気が気でなかったと言う。笑ってしまうような話ではあるが、当時のホーリネス教会の信仰であり、彼女の純情な姿が何とも微笑ましい。

終末の日には誰にも分からない。主人が突然帰って来た時、僕が課せられた仕事をしていなかったり、門番が門の傍で眠りこけているのを見つけられるかも知れない。終末の日には突然、来る。だから、主イエスは「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい」と言われる。どのように目を覚ましているのだろうか。

カール・バルトの翻訳者で、日本の良心的キリスト者を代表する井上良雄先生はキリスト教リアリズムについて、下記のように書いている。「人間が本当に人間らしくなること、神に造られた者にふさわしい姿になること。懼れなく、自由に、ユーモアをもって、しかも男々しく、今日の一日を生きること。一日の苦勞をして一日にて足らしめること。今日の一日を真に現的に生きること。日々の苦惱に対して、根本的な楽天観をもって、然りと言うこと。世界観や思弁のために生きぬこと。単純に眞実を喜び、美を喜ぶものとして生きること。」終末の日を待つ、目を覚ましているとは、このリアリズムを生きることではないか。